

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	井伏鱒二と宮沢賢治の文学における郷土観：地域の古代に根差す「内なる故郷」を視座として
Author(s)	青木（秋枝），美保
Citation	近代文学試論，60：1 - 12
Issue Date	2022-12-25
DOI	
Self DOI	10.15027/54877
URL	https://doi.org/10.15027/54877
Right	
Relation	



井伏鱒二と宮沢賢治の文学における郷土観

― 地域の古代に根差す「内なる故郷」を視座として ―

青木（秋枝）美保

はじめに

本稿においては、宮沢賢治（一八九六～一九三三）と井伏鱒二（一八九八～一九九三）の文学についての比較研究（科学研究費・基盤研究C「作家の文学形成と「地方同学コミュニティ」―井伏・高田と宮沢賢治の場合」〔二〇二〇年度～二〇二四年度〕の一部を発表する。本稿は、二〇二一年から二〇二二年にかけて行った井伏鱒二の郷土観を主題に行った新たな実地調査の結果を踏まえて、宮沢賢治・井伏鱒二世代の文学史的位置づけについて、新見地を提示するものである。

井伏鱒二と宮沢賢治の比較研究は、中四国宮沢賢治研究会主催で二〇〇九年に開催された宮沢賢治学会福山セミナー・シンポジウム「宮沢賢治の文語詩と井伏鱒二の『在所もの』」（二〇〇九年十一月二十一日、福山大学社会連携センター）での研究から始まった。その成果は、当研究会の機関誌『論攷宮沢賢治 第9号』（中四国宮沢賢治研究会二〇一〇年十二月二十日）でまとめられた。

その巻頭に、磯貝英夫著「宮沢賢治と井伏鱒二」が掲載されている。これは、前述のシンポジウムにおける基調講演「宮沢賢治と井伏鱒二の文学」の記録であるが、井伏・賢治の文学の比較という新たな研究

について一つの視座を開くものとなっている。

筆者は福山大学赴任後（二〇〇五年～）に、学生とのゼミ活動の中で井伏鱒二の「在所もの」についての実地調査を行って来た。調査には、井伏鱒二研究者の前田貞昭氏、当時ふくやま文学館長であった磯貝英夫先生にも可能な限り同行を願った。その調査の中で二〇一六年、井伏鱒二の、中学時代の級友・高田類三宛の書簡が筆者のもとに委託され、その公開は、ふくやま文学館（館長・岩崎文人氏）において行った。その後、その研究は、科学研究費・基盤研究C「井伏鱒二未公開書簡の基礎的研究―文学の生成と「同学コミュニティ」の関係視座に―」（二〇一七年度～二〇一九年度）に採択され、成果は、『報告書 同上』（福山大学日本近現代文学研究室内科研究チーム編、二〇二〇年二月二十七日発行）で発表した。それを踏まえて、現在は、冒頭の研究が始まっている。

本稿においては、井伏鱒二の郷土観と宮沢賢治のそれとを比較し、昭和初期の文学史における「地方」の意味を考察する。

1、昭和初期文学における「地方」の位置づけ

― 磯貝英夫「宮沢賢治と井伏鱒二を起点として―

磯貝英夫は、「宮沢賢治と井伏鱒二」（前掲）の中で、次のように述べている。

さて、宮沢賢治と井伏鱒二を比較するとなると、生きかた、資質、作風とも、異なるところが目立ちすぎるのですが、最も大きな文脈で眺めると、注目すべき、基本的な共通点が浮上します。

すなわち、両者共に、〈故郷〉に深く根ざすことによって文学的生命を獲得した文学者であったということです。これは一見単純なことなのですが、私は、このありようを、以前から文学史的な事件とする思いを持ってきました。

以上の様に、磯貝は、井伏鱒二と宮沢賢治の「文学的生命」を、「故郷」に深く根ざす」ところに見ていると同時に、それを「文学史的な事件」として捉える構想を持っていたと言える。

その発想は、小林秀雄が、「宮沢賢治が没した昭和八年」に発表した評論「故郷を失った文学」²（『文藝春秋』昭和八年五月）が起点となっている。その時の小林の立脚点について、磯貝は次のように述べている。

当時の小林は、西洋の諸観念を追って浮遊する同時代文学の最も手きびしい指弾者として頭角を現わしてきたのですが、この評論は、ほかならぬ自分自身を軸として、その不安や焦燥を、故郷喪失という基本概念にしばって対象化した実感的な論として、注目されるものです。

このように、磯貝は、小林が「同時代文学」を「西洋の諸観念を追って浮遊する」と見、その状況を「故郷喪失」という基本概念」によ

って「対象化した」こと、そしてそれが、「自分自身を軸として」なされた「実感的な論」であることを指摘して、小林の批評の姿勢の起点を示している。

そして、磯貝は、この「故郷喪失」という基本概念が昭和初期の小林にとどまらず、戦後伊藤整が日本の文壇に対して名付けた「逃亡奴隷」という概念とも繋がっていることに言及し、「故郷」に対する背馳によって特徴づけられる日本近代文学の、一筋の文学史的展望を示している。

ところが、井伏鱒二と宮沢賢治の文学はそういった日本文学史の概況には「収まらない」とし、「二人とも、日本近代文学史上の異例の存在ということになります」として、両者の共通性を論ずる視点を提示して、それぞれの文学の特徴に論を進めている。

まず取り上げられたのは、井伏鱒二についてである。ここでも、小林の評論「井伏鱒二の作品について」³（『都新聞』昭和六年二月）における小林の井伏評を踏まえて論が展開する。小林が、「在所ものの頂点としての「丹下氏邸」について」、「構造は最も完璧」で、その文章の「一字も彼の心から逸脱してをりません」と言い切って「いるとし、その評価を踏まえて井伏文学の内実を論じている。

そして、井伏自身の言葉として『川と谷間』（創元社、創元選書三一、昭和十四年十月）の「序」⁴から「私の土俗趣味に根拠を置く」、「私の空想による田園を現はした一種の風物誌」という言葉を掲げて、磯貝は「井伏はここで、自分の〈内なる故郷〉に降り立ったと言ってよいでしょう」と述べている。そして、その〈故郷〉がそれまでの農村文学や農民文学のいずれとも「ちがった「面貌」を持つもの」、あ

るいはそれらの「どれをも含みつつ、ちがった面貌を持つものとして現われた」と、その独自性を強調する。

そして、「初期の在所ものの特色」を、第一に「その在所が、井伏が独自に開発した諧謔文体によってあざやかに打ち出された」こと、第二に「現実のそれよりも古色をおびて出現した」こととし、その根底に「農村共同体的マインド」(その「心性」を「江戸文士」のもの、「庄屋文学」とも換言している)を挙げている。そして、「要するに、井伏は、「故郷」の基底に流れるこういう伏流水に根ざすことによって、近・現代の範疇を超える異色の存在感を示すことになった」とする。

これに対して、宮沢賢治については、井伏との共通性として「まったく新しい詩法の開発」(心象スケッチ)があつたことを挙げ、それによつて、「仏教と自然科学と故郷の風土||自然との融合したふしぎな心象世界」を描き出し、「日本の山川草木をかつてない豊饒さで立ちあがらせ」たとする。それを可能にした「根本の意識」について、「有機交流電燈」などという斬新な比喻でモダナイズされた、古い仏教の認識論を内化させたそれ」だという。

磯貝は、これらの各論を踏まえて両者の共通点を、次の三点にまとめている。

- ① 故郷へ降り立った。
- ② 新しい独自の表現・文体を開発した。
- ③ 人々の心の古層に根を下ろした。

ただ、この三点のいずれにおいても、それぞれの内実は全く異なり、「似るところはほとんどありません」と述べているが、「笑い」については、その違いを追求することが「一つの興味深い道筋になりそうで

す」と、このテーマの展望を示している。そのうえで、①の「故郷」については、「主に郷里の風土・自然と一体化した賢治と、農村・農民の生活に降り立った鱒二」との違いを指摘し、それを井伏・宮澤両家の社会的位置の違いに帰している。②の表現技法の開発については、「心の故郷に降り立った者の一種のくつろぎを土台とするもの」か、という見方を示し、両者のユーモアの源泉をそこに見ている。③の「人々の心の古層」についても、「仏教と深いところで交又する意識層、対、生活者(農民)が長い時間のうちに蓄積した慣習や知恵の層」と、両者の異質性を挙げている。

以上のように、磯貝の論においては、井伏鱒二と宮沢賢治の文学を論じるに際して、「故郷に深く根ざした文学」という共通性を示しながら、最終的には、両者の基本的な違いに収斂して論を締めくくつていると言える。

さて、本稿においては、磯貝の提示した文学史の視座をふまえながら、宮沢賢治文学における郷土観についての、筆者のこれまでの研究に、新たに、井伏鱒二の郷土観についての実地調査を踏まえた見方を示して、両者の文学における「故郷」の現れ方の共通性について指摘し、そこに新たな文学史的視座を提示する。

2、井伏鱒二と宮沢賢治の同時代性について

—宮沢賢治の時空意識を基点として—

井伏鱒二と宮沢賢治の文学についてのこれまでの調査から見えて

来たことは、二人がいずれも一九一〇年代（明治末期から大正初期）に十代後半を過ごし、一九二〇年代（大正末期から昭和初期）にかけて新たな文学を提示した者たちであり、そこに文学としての同時代性を見る事ができるといふことである。両者の文学について、その「同時代性」を踏まえ、それを背景として文学史的な展望が示せるはずであり、これについてはその「同時代性」の見方によって複数の視点を提示することができそうである。

本論においては、その複数の視点の中から一九一〇年代思潮における、日本の歴史の起源への遡行について注目してみたい。筆者は、拙著『宮沢賢治 北方への志向』（朝文社、一九九六年九月）において、詩集『春と修羅』『序詩』をはじめとする賢治の初期作品における時空意識を明らかにした。それは、明治以降の考古学的な研究の成果を背景に、日本の歴史の起源としての郷土・東北の始原のイメージに根差していた。これに加えて、本年の井伏鱒二の郷土観の調査によって、これと同様の、郷土の歴史の始原に遡る視点を、井伏鱒二においても見出すことができたのである。

まず、賢治の郷土観について、拙著からまとめておく。

賢治の時空意識は、『春と修羅』（関根書店、大正十三年四月）「序詩」（詩末尾に「大正十三年一月廿日」の日付）の後半部に端的に示されている。⁵前半部が、「心象スケッチ」について、「せはしくせはしく明滅しながら／いかにもたしかにともりつづける」「因果交流電燈」の「照明」としての「心象」の、「明滅」の瞬間瞬間の記録であることを述べているのに対して、詩の末尾は、その「心象」の連続性に視点を移して次のように締めくくられる。

すべてこれらの命題は

心象や時間それ自身の性質として

第四次延長のなかで主張されます

「第四次延長」とは、時空そのものが変化していく軌跡を示していると考えられる。

そして、詩の後半部分の最初には、その「心象」の、瞬間瞬間の構造について、次のように表現されている。

けれどもこれら新「生」代沖積世の

巨大に明るい時間の集積のなかで

正しくうつされた筈のこれらのことばが

わづかその一点にも均しい明暗のうちに

（あるいは修羅の十億年）

すではやくもその組立や質を变じ

しかもわたくしも印刷者も

それを変らないとして感ずることは

傾向としてはあり得ます

つまり、ここで表現されているのは、瞬間瞬間の「心象」の時間構造であり、そこには、「巨大に明るい時間の集積」、すなわち「修羅の十億年」が畳み込まれているということだと言える。

ここに、磯貝の言う「内なる故郷」の内実の一端を見ることができると言えよう。このような意識の構造的な捉え方は、磯貝の言う「古い仏教の認識論を内化させたそれ」、および「仏教と深いところで交叉する意識層」に繋がるものとも言えるが、無意識に光を当てた心理学や、進化論を踏まえた生物学、相対性理論発表後の物理学、発掘の成

果を踏まえた考古学といった同時代のパラダイムチェンジが背景にあることは、詩に現れる学問的な用語からも推測されるところであり、それは拙著においてもある程度示した。

その典型は、序詩における次の一節であろう。

おそらくこれから二千年もたつたころは

それ相当のちがつた地質学が流用され

相当した証拠もまた次次過去から現出し

みんなは二千年ぐらゐ前には

青ぞらいつばいの無色な孔雀が居たとおもひ

新進の大学士たちは気圏のいちばんの上層

きらびやかな氷窒素のあたりから

すてきな化石を発掘したり

あるひは白亜紀砂岩の層面に

透明な人類の巨大な足跡を

発見するかもしれません

ここに描かれているのは、意識構造の垂直的なイメージのモデルを提示したと思われる地質学、考古学を基礎とした世界観である。そこにあるのは、賢治が専攻した地質学による時間認識を基礎に、各地層に埋もれた生物の生存の痕跡を発見する考古学の成果を踏まえて、そこから過去の生物を含む世界の解釈に向う、という認識の過程である。そこには、現代から未来へと流れる時間の中で、つまりそれが「第四次延長」ということになるが、その中に自己を定位することが生きることだという認識があると考えられる。

磯貝が言う「人々の心の古層に根を下ろした」という賢治の文学の

内実の一端は、このような方法によって実現されているとみることができる。そういった発想の背景にあるのは、拙著で明らかにしたように、明治二十年代（一八八〇年代）から大正期（一九二〇年代）にかけて隆盛となった始原学であると言える。そこでは、発掘された遺物と神話・伝承とをつなぐ解釈によって、日本の歴史の起源へと遡行していく試みがなされた。明治二十年代には、坪井正五郎が「先住民族」コロボックル」という説を主張して話題となった。その隆盛は、自らのルーツを見極めようとする傾向と見ることができる。それは、前述のように、小林秀雄が「故郷を失つた文学」で指摘した、西洋文化を急激に導入した結果「浮遊する」人々の「不安と焦燥」の裏返しと見ることができかもしれない。

その考古学の発掘ブームは、学問的なレベルにとどまらず、一般民衆を巻き込んで雑誌メディアをはじめ、出版界を賑わした。その中で特に注目されるのは、明治末期の少年雑誌における科学読み物である。それは、井伏や賢治の少年時代にあたり、「故郷」を見る視点に影響を与えたと言つてよからう。

さて、そのような中で、賢治は地域に伝承された蝦夷の族長「達谷の悪路王」伝説、日本武尊の死にまつわる故事など、古代的なイメージを多く描いている。賢治の「内なる故郷」には、こういった古代の遺物・遺産から、現代の新しい農業施設「小岩井農場」までが層をなしていたと言える。それが、賢治の「内なる故郷」、「イーハトーブ」の一面であったと言えよう。そして、その中心的な場所は、岩手山と岩手山麓一帯であった。拙著においては、その一帯が、詩集『春と修羅』全体において、賢治の聖地行―高みへ、北方への起点であること

を、詩の構成から論証した。また、もう一つの心象スケッチ集である童話集『注文の多い料理店』の舞台もここに重なっており、この一帯に賢治の初期作品ワールドが重なっている。

そして、この地域、現滝沢村一帯は、縄文文化の繁栄した土地として位置づけられている。当時は柳田國男の『遠野物語』が話題を集めていたと思われるが、賢治が「内なる故郷」としたのが、それとは異なる縄文文化の栄えた古代の楽園であったことに、賢治の文学の特徴を明確に見ることができるといえる。その楽園の様子は、現代の郷土資料において「古代の岩手山麓滝沢は、岩手山の伏流水による沢の流域で、農耕をやり、広い山野の自然物を採取し、川からはサケ(鮭)などもとれて、豊かな生活条件をそなえた地域であった」と説明されている。

そして、『岩手日報』で紹介された郷土史家の滝沢村に関する著作『滝沢史談』においては、この地が、坂上田村麻呂の蝦夷征伐、源頼義義家の前九年の役、鎌倉幕府の藤原泰衡征伐など、歴史的な場所であるにもかかわらず、それを証拠立てる「旧記」がないと述べているが、そのことは、賢治の自由な想像をはばたかせるためには好都合であったことをも示している。「イーハトーブ」という名称は、そのような「内なる故郷」に付されたものと考えられることも可能であろう。

3、井伏鱒二文学における郷土観

— 古代の備後・「穴の海」伝説について —

井伏鱒二の郷里・福山市の中心を流れる芦田川流域の神辺平野が古代、「穴の海」という入海であったということは、近世の地誌をはじめ、

地域の歴史を語る現代の様々な地域資料に至るまで繰り返されている。そのことが、井伏鱒二の郷里について述べた随筆にも登場し、井伏の「内なる故郷」の原点となっている。

井伏鱒二の郷土観を示す作品としては、「郷里風土記」(『文芸』、改造社、第六卷第三号、昭和十三年三月一日発行)、「郷里に寄す」(『知性』、第二卷第十号(十月号)、昭和十四年十月一日発行)があり、いずれも昭和十年代の作品である。

随筆「郷里風土記」には、郷土について、次のようにある。少し長くなるが、引用する。

私の郷里は広島県深安郡加茂村である。初対面の人に云ふときには、郷里は備後ですとたいていさう云つてゐる。「中略」

備後は地勢的關係から東部の經濟的中心地は福山市、西部の經濟的中心地は尾道市である。「中略」ここは古い港で往時は軍事上の要港であつた。足利尊氏なども四国で勢ひを盛り返して京都へ攻め入る前、三年間ほど尾道に軍を駐めて天下の形勢をうかがつてゐた。その三年間、尊氏は西国寺といふ古利で坐禪をして一と振りの刀劍をこの寺に奉納した。その刀はいまでも保存されてゐる筈である。尾道よりも鞆の津はまだ古い時代の軍港であるが、今では画家や觀光客の集まる遊覽地の觀を見せてゐる。この附近には神代以来の伝説的古跡がたくさんある。神武天皇の高島のお泊りをはじめ神功皇后が筑紫にお渡りになるときの水軍の根拠地など、その他いろいろ云ひつくせないほどたくさん古跡がある。しかしただ伝説的古跡にとどまるものか、役所でも史跡保存の方法を講じてゐない。北の山地にもいろいろの古い史跡があ

る。古事記で重要な比婆の山といふのはどの山か私は知らないが、比婆は今では伯耆でなく備後の領分である。むかし備後の盆地は奥行き深い入り海になつてゐたといはれるが、奈良の都と出雲との交通路はこの入り海の岸に沿ふて通じてゐた。これは地理的にも考古学的にも史実的にも証明されてゐる。日本武尊が道中難渋されておいでになつたとき、一夜のお宿をお勧め申し御歎待申し上げた一土民の家は、いまでもその末孫といふ家族が英ちやんのうちの直ぐ裏の家で立派に暮らしてゐる。

〔中略〕このあたりから山地にかけ、南向きの斜面には古墳の集団がよく見つかつた。私も子供のとき裏の山で幾つとなく古墳を発掘し、土器をたくさん所有して遊戯のときに使用した。そのうちに瓢箪をつくるのが備後全体の子供たちの間の流行となつて、私たちは土器で遊ぶのを止して瓢箪の苗を自分で植ゑ自分でその実の種子をぬき自分で磨いて遊ぶのであつた。

このように、ここでは、「神代以来の伝説的古跡」として、「古事記」「日本書紀」などの英雄にまつわる伝説と関係の深い地であることを示しながら、郷里の地の来歴を開陳している。

その中心となつてゐるのは、瀬戸内海の軍港・鞆の浦と「入り海」の存在であり、それは「奈良の都と出雲との交通路」となつてゐるとあり、当地域の中央の政権との繋がりを捉えている。この「入り海」が「穴の海」と呼ばれているものであるが、その呼称は、随筆「架空動物譜」⑩（『文芸春秋』第十一年第七号（七月号）、昭和八年七月一日発行）に、登場している。これは、人魚、龍、河童など空想上の水生動物について述べたものであるが、糸崎にあるという人魚塚を訪ね

るフィールドワークについて述べた箇所、次のように登場する。

その旅行（引用者注―糸崎への旅行）の帰りみち、私は理由なく大津駅で下車した。そして駅前旅館で鶴賓外史の「穴の海に絡まる伝説」を読み、偶然にも琵琶湖畔に人魚塚のあることを知つた。けれど私はその所在がわからなかつたので、また私たちに無用な人魚塚など、どうしてこんなに自分は見たがつてゐたのであらうと反省して、見に行くのは止しにした。鶴賓外史の文章で判断すると、人魚塚といふものは相当に芸術的にできあがつてゐるものと思はれる。

井伏の郷里についての随想は、「穴の海」の周りを巡りながら、微妙な広がりを見せている。この人魚にまつわる話は、「穴の海」と繋がる別の伝説「中条いわしと人魚」⑪にも繋がっている。これら水生動物にまつわる考察は、井伏初期の作品に登場する鯉や山椒魚の物語との繋がりを連想させる。

さて、「鶴賓外史の「穴の海」に絡まる伝説」とは、何を指すのだろうか。「鶴賓外史」は濱本鶴賓（一八八三年～一九四九年）で、福山市出身の郷土史家である。「穴の海」伝説にまつわる論文・著書としては、神武天皇の東征の際の聖蹟「高島のお泊り」すなわち「吉備高島宮」について考証したものが多く公刊されている。

これらの文章は、昭和十五年を神武天皇即位二六〇〇年とする紀元節の祝賀行事の一環として行われた、文部省主催の全国一府九県に所在する三十六ヶ所の聖蹟調査に係つて発表されたものである。福山市・岡山市に関連する調査対象の一つが「吉備高島宮」であり、比定地について論争となつた。濱本鶴賓は、備後説を提唱した。その論争の経

過は、雑誌『備後史談』（備後郷土史会発行、大正十四年創刊）によって知ることができる。ちなみに、井伏の兄・文夫は、昭和二年一月に同会の常任理事となつている（『備後史談』第三卷第二号、昭和二年二月）。なお、紙数の関係でこの論争の詳細は省くが、高島宮に関する鶴賓の関心は、明治四十四年出版とされる著書からのようで、この間、鶴賓が発表したのは、管見に入つたものだけで著書三冊、論文八篇（『備後史談』掲載）に上つている。

それらの濱本鶴賓の文章から、「穴の海」についての記述を挙げる（『水呑村の上古と聖蹟高島』聖蹟高島顕彰会（沼隈郡水呑村役場内）昭和十五年二月）。

穴海あなうみの名称は穴の如く陸地深く洞入した湾で、普通名詞であらうといふ学者もあるが、初めは普通名詞から起つたにせよ、吉備の穴海は固有名詞である。それは穴海の周辺に穴国あなくにがあり、大化以降穴郡、婀娜郡、安那郡となり、ヤスナ郡と読むに至つた経路が明であるから、穴国の名が穴海から起つた以上、穴海は穴国にあるべく、穴国が安那郡の名によつて証明出来る以上、穴海が備後にあつたことは少しも疑ふ余地が無い、岡山地方だとか児島湾だとかいふ古い説は軽く一蹴するに足り、今日では何人も備後にあつたことを疑はない。

穴海の歴史が初めて見えたのは日本書紀景行紀である。日本武尊が九州の熊襲を平らげての帰途、穴海で悪神を滅ぼされた事実が載せられて居る、この悪神は穴海に巢窟を構えた海賊の長かみ（神）であらう。

ここには、「穴海」の歴史的意義が、「日本書紀景行紀」の記述を踏

まえて述べられるとともに、大化の改新以後の備後の国の一部として「穴国」があり、その行政区としての「穴郡、婀娜郡、安那郡」の地名を根拠として挙げながら、古文獻の記述を史実として説明しているところに特徴がある。井伏が「郷里風土記」において、「これは地理的にも考古学的にも史実的にも証明されてゐる」と強調している背景には、このような郷土における言説があつたと言える。

ここに挙げられた日本武尊による「穴の海」の悪神退治は、畿内の王権による地方勢力の征服の一端を示すものと言える。現代の古代史研究上は、六世紀後半から七世紀にかけて、畿内政権の確立と日本の国家形成が進む過程で地方勢力の再編成が行われたとされ、その際に吉備国は、備前、備中、備後に分割され、特にその際備後は中央政権とのつながりを強く持つことになつたことが、同時期の古墳の様子などから史実として認められている（『福山市史 原始から現代まで』¹³等による）。「日本書紀景行紀」では「既にして海路より倭に還りて、吉備に至りて穴海を渡る。其の處ところに悪あつぶる神有り。即ち殺しつ。」（『日本古典文学大系 67 日本書紀 上』、岩波書店、一九七九年）とある。ちなみに、『日本古典文学大系 67』の当該箇所箇所の頭注六では、「穴海」は次のように説明されている。

穴は、安閑二年五月条に婀娜国と見え、旧事紀、国造本紀には吉備穴国造とある。後の備後国安那（やすな）郡・深津郡。今、広島県深安郡・福山市。芦田川の河口、饗島を控えた海が袋のように入り込んだ地で、古来瀬戸内海航路の要衝。

ここに示されているように、また、濱本鶴實も前述の文章で強調していたように、「穴国」は古代の文献に登場する実在の地名として認められている。

「穴国」と中央政権との繋がりは、産業が隆盛で豊かな土地であったこと、交通の便が良く産物の運搬が容易であったことが要因であろう。それは、延喜式に記載された税の内容にも見ることができ。

また、この地域に当時実在した人物名として、古文獻に記述され

た、「穴君」・「安那公」（『姓氏録』）、「安那臣」（『古事

記』）、「穴臣」（平城宮出土木簡）があると言う。また、『日本

異記』「鬮體の目の穴の筭の擲すを脱ちて祈りて盡しき表を

示す縁 第二十七」に、宝龜九年（七七八）の話として、「葦

田郡窟穴国郷の穴君の弟公」という人物が登場する（出雲路修・

校注『新日本古典文学大系30』岩波書店、一九九六年）。

このように見てくれば、「穴の海」周辺は、八世紀成立の古文獻にすでに記載があり、中央政権に対して特別な存在感を持った一地域であったことが見てくるのである。ここで取り上げた古文獻における記述は、すでに江戸時代後期に福山藩の庄屋・馬屋原重帯がまとめた地誌「西備名区」にも紹介されている（『備後叢書（三）』備後郷土史会編纂、歴史図書社発行、一九七〇年九月、『同（四）』。そして、井伏の前述の随筆の「日本武尊が道中難渋されておいでになつたとき、一夜のお宿をお勧め申し御欲待申し上げた一土民の家は、いまでもその末孫といふ家族が英ちやんのうちの直ぐ裏の家で立派に暮らしてゐる。」という一節には、千年あまり同じ地に住み続けていると

いう、地域についての独特の感覚を見ることができ。

さて、このような古代生活の実感については、井伏の文章の引用末尾に登場する少年時代の古墳発掘についての記述が特に注目される。

井伏少年は自ら古墳を発掘し、土器を所有していたという。

二〇二二年五月二十一日、福山大学日本近現代文学ゼミでは、井伏生家裏山の古墳を実地調査した。調査の指導者は、元広島県事業団埋蔵文化財室室長・篠原芳秀氏である。調査に当たって、県の埋蔵文化財台帳から未調査の「土井古墳群」に当たりをつけられ、事前調査においてその場所を発見された。我々は、氏の案内で井伏生家から十五分程度歩いた山の斜面に、横穴式石室の露頭部を二基見ることができた。「土井1号古墳」「土井2号古墳」である。今は石室内が埋まっていた土器等の遺物があるかを確認することはできなかったが、確かに少年井伏の行動範囲内に古墳が実在したことを確認することができた。

同時代の古墳の発掘状況について、『備後史談』にはいくつかの報告があり、賢治の場合と同様に、地域の郷土史家の関心の強さを知ることができる。昭和二年から十五年にかけて発掘の具体的な事例の紹介がある。これらの詳細は、紙数の関係上、稿を改めることとする。

4、井伏鱒二と宮沢賢治の「内なる故郷」について

— 現在に「時間の集積」を曇み込む —

宮沢賢治も、井伏鱒二も、郷里の生活の起源となる古代の生活を起點として、その「内なる故郷」を構成しはじめたと考えてよいと思われる。磯貝が二人の共通点として挙げた「人々の心の古層に根を下ろ

した」ということの内実を、そこに見ることができるとはなからうか。確かに、磯貝が言うように、二人の生活環境は全く異なるが、郷里に向き合う方向性については共通性があると言ってよいように思われる。

宮沢賢治の場合は、「内なる故郷」として、岩手山・岩手山麓の縄文文化栄える楽園を原点としたと言える。それは、山の自然の一部として、人間と他の生物とが棲む空間を共有する楽園であり、その典型は「なめとこ山の熊」における熊と猟師の関係に見ることができよう。ただ、その空間は、「小岩井農場」という新しい自然と人間の関係の場を含み込み、賢治に様々な問題を提起し、思考を展開させる場となった。ここでは、人間の生活の原点と、現代的な姿との両方を感じることができ、その変化を一つの空間において実感できた。その空間に賢治は「イーハトーブ」と名付けたと言える。

これに対して、井伏鱒二の場合は、「内なる故郷」として、「穴の海」周辺地域の生活を原点としたと言える。「穴の海」とは、古代の良港である「潟港」を指すと考えられる。

「潟港」については、日本海についての事例が多く挙げられている。藤田富士夫『古代の日本海文化 海人文化の伝統と交流』（中公新書、一九九〇年）には、次のようにある。

日本海沿岸には、海と砂丘で隔てられた潟湖が多い。あるいは、今は埋まってしまっているがかつて潟湖があったと推定される地形がある。〔中略〕

天然の潟湖は古代の良港＝潟港として古代の文化交流に大きな役割を果たした。その周辺には潟湖を中心とした文化が生まれ、

交易による富の集積は土地の繁栄をもたらした。

芦田川流域の地形について、『福山市史 原始から現代まで』（前景）においては、神辺町の御領遺跡から出土した船の描かれた土器片（二～三世紀に比定）から、「その昔、神辺平野一帯は「穴（婀娜）の海」と呼ばれていたという伝説があります。当時の海岸線について、現状では過大評価はできませんが、芦田川が大きく曲がる神辺平野付近では湿地帯が大きく広がり、そこには河川交通の拠点も存在したと考えられます。」と、述べている。

こういった空間に長らく積み重ねられた心性とはどのようなものであろうか。日本海の潟港を拠点とする海人集団について、三浦祐之は、『「海の民」の日本神話 古代ヤポネシア表通りをゆく』（新潮選書、二〇二一年九月）において、大小のラグーン（潟湖）を拠点として、対等に交易をしながら自由に行き来する「国家以前」の「非国家的社会」を想定し、その自由な生き方を強調している。井伏鱒二の「在所」が、そういった海人集団の心性に根を持つと見ることは、磯貝の言う農村共同体の心性に井伏の「内なる故郷」を見るときは、磯貝からすれば、無謀な見解と言えるかもしれない。だが、「ジョン万次郎漂流記」¹⁵（河出書房、昭和十二年十一月）の末尾の「ただ一つ思ひ出しても胸の高鳴る欲望は、捕鯨船を仕立て遠洋に乗り出して鯨を追ひまはしたいといふ青春の夢であった。」という一文に井伏の「内なる故郷」の一端を見て、新たな井伏像を想像してみたい気もするのである。それは、あながち無理なことではないのではなからうか。

さて、現代においては、芦田川流域から加茂町にかけて、また神辺平野一帯は、県内でも有数の古墳密集地として知られており、その周

辺に製鉄遺蹟や窯業遺跡などの産業遺跡も発掘されている。その様相は、現代の産業団地の分布にほぼそのまま重なっている。それは、地域の人々によって一五〇〇年近くをほぼ同じところに、基本的に同じ営みを保ち続けながら住み続けられてきたことを示しており、この地域の稀有な持続性を感じさせる。その根底には、地域の生活における経済的、政治的自立性があると思われる。備後国の起源に遡れば、備後国は、吉備国と出雲国の間に位置するとともに、中央政権との関係の中で独自の存在感を示して自立したという経緯を持っている。そこには、土地の資源を活かし、長い技術の伝統に根ざし、政治的には中央の権力と隣接する大国との間のパワーバランスを保持しつつ自己主張しないという、独特の社会的姿勢があると言えるのではないか。その自立性は、精神の自由を保証する。それが、日本海とは異なる、瀬戸内海鴻港の海人の心性ではないか。それは、磯貝の言う「庄屋文学」の心性に近づくように思われる。その「内なる故郷」が、井伏文学における「在所」と言えるのではなからうか。

さて、このように見てくれば、井伏鱒二と宮沢賢治の「内なる故郷」は、地域の生活の起源に根ざすとともに、いずれもその「内なる故郷」が自由な精神を確保する場を提供するものであったところに共通性があると言える。彼等は、磯貝がすでに指摘しているようにいざれも現実には縛られない自由な精神を持ち続けたのであり、それは、彼らが本質的にロマン主義者であることを意味すると言えよう。一九一〇年代に十代後半を過ごした彼等は、明治末期の反自然主義的精神を継承し、ロマン主義的精神によって自然主義的リアリズムを新たに展開させた世代だというのが、これまでの調査によって見えて来た仮説

である。そのリアリズムの新たなあり方の根底に「内なる故郷」があったということではなからうか。

注

(1) 中四国宮沢賢治研究会は、中四国に在住する宮沢賢治研究者の自主的な研究会（初代表・木村東吉、現代代表・伊藤眞一郎）。

(2) 『小林秀雄全集第二巻 Xへの手紙』（新潮社、二〇〇一年五月）所収

(3) 『小林秀雄全集第二巻 Xへの手紙』（新潮社、二〇〇一年五月）所収

(4) 『井伏鱒二全集第七巻』（筑摩書房、一九九七年一月）所収

(5) 『【新】校本宮沢賢治全集第二巻』（筑摩書房、一九九五年七月）所収

(6) 『滝沢村内遺跡詳細分析調査報告書Ⅰ』（滝沢村教育委員会、一九八九年一月）

拙著『宮沢賢治 北方への志向』（朝文社、一九九六年九月）五十八頁～六十頁参照。

(7) 下斗米昭一「滝沢の今昔」（滝沢小・中学校新転入教職員研修資料 村内めぐりガイドブック、一九八九年三月）

(8) 『井伏鱒二全集第七巻』筑摩書房、一九九七年一月、所収

(9) 『井伏鱒二全集第七巻』筑摩書房、一九九七年一月、所収

(10) 『井伏鱒二全集第四巻』筑摩書房、一九九六年十二月、所収

(11) 村上正名編『備後の伝説 上』（備後文化シリーズ第三集、児島書店、一九七〇年）「五 動物譚と妖怪譚」に「1穴の海の大魚―深安郡」、2中条いわしと人魚―深安郡神辺町中条」として収録。

(12) 「誠之館人物誌」によると、濱本鶴賓の著書として、『吉備高原考』、

一九一一（明治四十四）年、『改訂増補 吉備高島考』、一九一二（明

治四十五年) 年を挙げているが、未見である。井伏鱒二が福山中学に入学するのは、明治四十五年四月である。

(<https://seishikan-dousoukai.com/archive/jinneiroku/hamamoto-kakuhin/hamamoto-kakuhin.htm>)

(13) 『福山市史 原始から現代まで』(福山市、二〇一七年三月) 所収の西別府元日「古代総論」等参照。

(14) 宝賀寿男『古代氏族の研究① 和珥氏 中国江南から来た海神族の流れ』(青垣出版、二〇一二年三月)

(15) 『井伏鱒二全集第六巻』(筑摩書房、一九九七年六月) 所収

(あおき(あきえだ) みほ、福山大学人間文化学部教授)